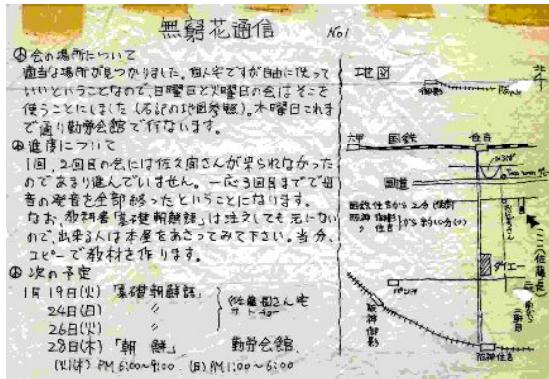


『むくげ通信』250号を迎えることが出来ました—技術論的ふりかえり—

本通信は、本号でめでたく250号となりました。ご愛読くださっているみなさまに感謝申し上げます。

1号は、1971年1月の発行です。セピア色の貴重なもので、A5版、1枚、ガリ版ではありません。なんとカーボン紙で作っています。字は堀内さん。手書きは誰が書いたのか後で分かるので便利です。



3号(1971.2.25)までの通信は、勉強会案内の1枚ものです。4号(1971.3.30)では、むくげの会主催の姜在彦先生講演会「歴史から見た朝鮮と日本」の記録と事務連絡(B4表裏)が掲載されています。その後また事務連絡的通信が続きますが、8号(1971.8.7、B4、5頁)では佐久間英明「日韓条約をめぐる歴史的背景」などが載っています。そして9号(1971.9.27)からは、B5、縦書きの通信となり、それが159号(1996.11.24)まで続きます。頁数は、6~28頁ですが、22号(1974.1.27)からはほぼ28頁の通信が2か月に一度発行されています。年一冊の合本も1974年版から出されています。74年版、75年版の在庫はありませんが、それ以外はほぼすべて揃っているというのだから、マニアックというほかありません。毎号合本用の通信を保存して合本にしていましたが、バックナンバーの希望があつても「合本まで待つ」と断つたりしていました。合本がなくなつて、韓国の友人に原本を一冊あづけて複写版を作つてもらつこともあります。合本の表紙挿絵は、1978年版~88年版まで原勘太郎さんにお願いし、89年から99年まで宋貴美子さんにお願いしました。167号(1988.3.29)から各号に志村三津子さんが挿絵をかいてくださることになり、今もお願いしています。合本の表紙は2000年から志村さんの挿絵です。感謝しています。

160号(1997.1.30)からは、同じくB5版ですが、横書きになりました。それが、243号(2010.11.28)まで続き、そして、244号(2011.1.30)からA4版となり現在に至っています。

さて、この間、通信の印刷技術—といつても印刷機

ですが—が長足の進歩をしました。1号、2号がカーボン版、3号(1971.2.25)からはガリ版です。JR三宮駅のすぐ北西・琴緒町にあった神戸アンポ社(ベ平連神戸)で印刷していました。手回しの輪転機です。その後、電動の輪転機になりました。2台目が故障したとき、当時アンポ社を主に使っていたむくげの会が購入することになりました。お金の出し方がとても民主的で、ボーナス総額×X=輪転機代(28万?)という式を作りそのXのとおり集めました。まだ学生だった私は支払いを免れました……。

その後、1978年5月にアンポ社から学生センターに事務所が移転して、同センターの輪転機をお借りすることになりました。

鉛筆でキコキコと書くガリ版は1982年まで続きます。夏など原紙が破れると、泣きながらもう一度キコキコとガリを切りました。そして「ガリよ、さらば!」、ファックスが登場したのです。今のFAXではありません。左右に2枚のドラムがあつて、左に版下、右に印刷原紙をいれて回転させます。およそ10分で、原紙に版下がそのまま焼き付けられます。版下は、鉛筆でOKとなつたのです。高級技術が必要であった見出しの大きな字もマジックでちょいちょいとなりました。でも版下は手書きです。それに革命をもたらしたのがワープロです。1985年ごろからぼちぼち登場します。きれいな字を書く人のワープロ導入が早く、きたない字を書く人の導入が進まないという状況が続きました。が、それもそのうち解消されました。

学生センターのリソーグラフは度々更新されましたが、昨年、画期的なカラー印刷機が導入されました。かしこい機械で、帳合までしてくれます。だれもそのスピードについていけなかつた堀内さんの帳合独壇場も終わりました。奇数月最終の日曜日の午後、それぞれが完全版下を持ち寄り、相互点検もなく印刷を始め、その日の夕方には、発送も完了するというスタイルが定着しています。したがつて?、誤植があつても個人の責任なので正誤表は出さないというスタイルも定着しています。

さて、合本が発行されていない幻のむくげ通信、1971年~74年分の通信を250号記念に復刻することにしました。1000円(送料160円)。私たちのマニアックに付き合おうという方はご注文ください。

今後とも、寛大な心をもつて、『むくげ通信』を見守ってくださいことをお願いして、250号のごあいさつを終わります。(飛田)